



特集

倶知安が歩んだ130年

クッチャンから 倶知安へ

倶知安町の始まりは、開拓者たちが初めてクッチャン原野に入った、1892年5月19日とされています。

ナラやアカダモなど、樹木が鬱蒼と生い茂る原生林を一本一本切り倒し、原野は少しずつ切り開かれていきました。

それから130年、発展したもののや衰退していったもの、そして今もなお残り続けるもの、さまざまな出来事や苦難を乗り越えて、現在の倶知安町の姿があります。

今となつては、この町がかつて、手つかずの原野であったことをイメージするのは難しいですが、下の年表を見ると、当時、開拓に力を注いだ人々の努力や思いが、確かに今に繋がっているということが感じられるのではないのでしょうか。

3 1919年11月15日、国鉄胆振線（倶知安・京極間）が開通し、それと同時に六郷駅・寒別駅が開業しました。住民の足として親しまれた国鉄胆振線でしたが、1986年10月31日をもって廃止となり、六郷駅・寒別駅も廃駅となりました。



▲六郷駅（左）と寒別駅（右）

21年	4代目役場庁舎がオープン ⁵
19年	G20観光大臣会合が開催
18年	くっちゃん保育所ぬくぬくが開所
2013年	2つの中学校が統合し、倶知安中学校が開校
99年	小川原脩記念美術館、旭ヶ丘公園パークゴルフ場がオープン
97年	羊蹄太鼓を町無形民俗文化財に指定
96年	保健福祉会館がオープン
95年	鹿児島県山川町と姉妹都市提携 ⁴
94年	総合体育館、絵本館がオープン
93年	最後の「町民大運動会」を開催
91年	倶知安町百周年、じゃが太くん誕生
89年	「雪トピアフェスティバル」を初開催
86年	「えぞふじ倶知安国体」が開催、国鉄胆振線が廃止 ³
72年	スキ一の町宣言
64年	サンモリッツ市と姉妹都市提携 ²
63年	「産業観光まつり（のちのじゃが祭り）」を初開催
56年	町内の上水道工事が竣工
22年	倶知安中学校、後志高等国民学校が開校
16年	町制施行、倶知安村から倶知安町となる
12年	レルヒ中佐一行が羊蹄山スキー登山
10年	後志支庁が開庁
1904年	北海道鉄道（現在のJR函館本線）が開通
96年	倶知安尋常小学校（のちの八幡小学校）が開校
95年	虻田村戸長役場倶知安出張所が開設
93年	倶知安村を設置
1892年	開拓者がクッチャン原野に入植 ¹

年表で振り返る
くっちゃん史

5 2021年5月6日、新役場庁舎での業務がスタート。以前の庁舎は1965年から50年以上にわたり使用していたため、老朽化や耐震性の不足、利便性の低下などのさまざまな問題がありました。

そのため、防災対策拠点としても機能する新庁舎を建設することとなり、これまで保健福祉会館や役場分庁舎で行っていた手続きが新庁舎でできるようになりました。



▲役場4代目庁舎

4 1995年8月4日、鹿児島県山川町と姉妹都市提携調印式を行いました。

その6年前の1989年、山川町さつまいもフェスティバルに倶知安町が招待されたことが、姉妹都市提携のきっかけでした。

山川町からは町長をはじめ23名の代表団が訪れ、じゃが祭りに参加したほか、子どもたちはサッカーの試合などで親睦を深めました。



▲姉妹都市提携調印式

2 1964年2月1日、冬季五輪視察のためスイスを訪れていた高橋清吉町長が、当時のサンモリッツ市長に姉妹都市提携を申し入れたことから、両都市の友好関係は始まりました。

市長らは町長が差し出したハンカチにその場でサイン、さらに公印を押すユニークな調印となりました。それから50年以上経った今でも人や文化の交流は続いています。



▲サンモリッツ市長ら来町（1986）

1 1892年5月19日、倶知安町の開拓の祖とも言われる徳島県出身の仁木竹吉が指揮を執り、クッチャン原野の開拓は進められました。

開拓者たちが初めてクッチャン原野に入ったのが1892年、その4年後には初の学校となる倶知安尋常小学校が開校しました。過酷な開拓生活の中でも子どもたちの教育を忘れていなかったことが分かります。



▲入植間もないころの開墾地



東京くっちゃん会 前会長
横濱 英紀 さん

倶知安で過ごした学生時代

1940年、倶知安町に生まれ、高校卒業までの約18年間を倶知安町で過ごしました。その後は横浜市に住処を移し、いくつかの会社に勤めた後、39歳で税理士資格を取得しました。現在は横浜市で税理士として会計事務所を営んでいます。

思い出すのは厳しい冬の記憶と羊蹄山

とにかく長い冬の雪と寒さに耐えた記憶があります。3月を迎え、雪解けが始まると、雪割りをして、恋しかった土の上を歩いたときの喜びは、今でも忘れることはできません。また、故郷に帰ってくるときに汽車の窓から羊蹄山を見て、帰ってきた実感がこみあげてくる、あの感動が今も胸に残っています。

日本人も外国人も寄り添いながら暮らせる町に

倶知安町には多くの自然があります。観光の町としての役割もありますが、この自然を利用した産業を発掘していくことが大切だと思います。

日本人だけでなく外国人も、町民みんなが肩を寄せ合うような町になってほしいです。

今回お話を伺ったお二人のように、ふるさとを離れてもなお、ふるさとを想い、愛してくれる人たちがいることは、町にとって誇らしいことです。これからもそうあり続けられるように、長く愛されるまちを共につくっていきましょう。

今後は後志自動車道「余市〜倶知安間」が開通予定、2030年度末には北海道新幹線「新函館〜札幌間」も開通予定です。倶知安町に新駅が誕生します。どちらも倶知安町にとって重要な転機となり、今後、町の姿や人の流れは大きく変わっていくことでしょう。

130年を迎えた町では、現在、記念映像を作成しているほか、関係者が出席する記念式典の開催を11月27日(土)に予定しています。

倶知安町のこれから

故郷を離れて、いま思うこと

倶知安町にゆかりのある人たちが集い、親睦や友好を通じて遠くの地からまちを思う「倶知安ふるさと交流会」。

今回、ふるさとを離れて暮らす「東京くっちゃん会」のお二人にお話を伺いました。



東京くっちゃん会 会長
高木 武良 さん(写真中央)

生まれ育った故郷を離れて

1942年、倶知安町に生まれ、高校卒業までを倶知安町で過ごしました。大学進学のために上京し、その後コンピュータ関連の会社に就職。2002年に退職し、現在は駐輪場管理の仕事をしています。

今も忘れることのない幼い頃の思い出

小学生の頃、夏休みに倶知安川で泳いだり、魚釣りをした楽しい思い出、遠足の途中、サイダー水の吹き出る水飲み場で一休みしたときの、美味しかったあの味は忘れられません。また、寒い朝、通学途中に見たダイヤモンドダストの美しさは一生の思い出です。

子どもからお年寄りまで安心して過ごせる町に

自然の宝庫のような故郷で、温泉を楽しみながら滞在できる場所があったらいいと思います。子どもからお年寄りまで、安心してのんびりと過ごせる町になってほしいです。